

『JAPAN REVIEW』 No. 1 (1990年刊) 掲載論文

文明の二つの型——超越論的文明と解釈学的文明

村上泰亮

要旨：文化（最広義の文化）の説明には三つの型がある。自然との関係からの説明（気候論・風土論・地政学など）、他人との関係からの説明（集団や組織の型からの説明）、そして宗教・哲学の型からの説明の三つである。この論文では、日本文化についての第三の型（宗教・哲学の型からのもの）を主として検討する。

人間は「反省する動物」である。反省行為の内容を考えてみると、そこには「反省する自我」と「反省される自我」の二重構造があり、したがって、「反省する自我」を無限に高次化する様態と、「反省される自我」にそのつど立ち返る様態との二つに、反省行為は分類される。それらをここでは、「超越論的反省」、「解釈学的反省」と呼ぶ。科学、哲学、有史宗教などでは、前者の超越論的反省が優越している。ここで「有史宗教」というのは、紀元前一千年紀の前半から、ギリシャ・ローマ、インド、中国で出現したいわゆる世界宗教をさす。

日本文化を宗教・哲学の型から説明するにあたっては、西方型有史宗教ないしユダヤ＝キリスト教と、仏教・儒教などに代表される東方型有史宗教との区別を考える必要がある。西方型と東方型の基本的相違は、超越論的反省の無限高次化に対処する姿勢の違いである。西方型有史宗教は、創造神の概念によって無限高次化を切断するのに対して、東方型有史宗教は、宇宙論的法則の概念によって無限高次化の収束を保証する。日本文化は東方型有史宗教から大きな影響をうけているが、日本社会の急速な、他の非欧米社会に先駆けた産業化は、この種の影響からは説明できない。むしろ課題は、東方型有史宗教の基本形からの逸脱がなぜ特に日本で起こったかの説明である。

日本文化の説明にかかわる第二の論点は、儒教の影響の評価である。儒教は仏教よりも世俗的であり、われわれの表現を使えば「解釈学的」であるが、最近とくに言われるほど産業化と直接に結びつくものではない。第一に、儒教的社会のマクロ政治構造は、静的調和を指向しており、経済というサブシステムの発展を解放したりはしない。第二に、儒教的社会のミクロ的基層は、血縁的であり、産業化に必要な機能的組織に適合しない。それに対して、日本の前近代社会は、マクロ的には政治統合が不十分であり、ミクロ的には血縁原則への依存が弱い。このような非儒教的特徴が、日本の急速な近代化の秘密である。アジア NIES の最近の急速な産業化の主要要因も、儒教的伝統であるとはいえない。

日本文化を説明するもう一つの仮説は、東方型有史宗教の影響が弱かったことを、逆に産業化の促進要因とする考え方である。この考え方は、或る意味で正しいが、古代的要素の残存を強調したりするのは単純すぎる。事実、律令期から平安期にかけての仏教の浸透は著しいものがあり、「此世と彼世との対立観」は日本人の心を明らかに捉えていた。このペシニズムが鎌倉期以降で転換するところに日本歴史の特徴がある。

この転換の原因は簡単ではない。日本の風土が変わりやすいが穏和であることも、この転換をもたらした一因である。地政学的に孤立していて強力な政治的統一を必要としなかったこと、またその反面、ミクロ的社会組織が血縁を越えた機能的集団の形で強化したことも、大きな原因になっている。これらは、最初に挙げた三つの説明の型の第一と第二にあたるものであり、三つの型の説明の相関によって文化を説明すべきだということのよい例である。

まとめていえば、日本文化は超越論的指向が弱く、解釈学的指向が強いという特徴をもっている。従来の常識からすると、この特徴は弱点と見られやすいが、それは正しくない。解釈学的指向が強い文化には、長所もあるが、短所もある。「国際化」という現時点の日本を担う課題からいえば、短所の克服に大きな努力を払う必要があるだろう。

エミシ、エゾ、アイヌ 〈その人類学的考察〉

埴原和郎

要旨：古代から中世にかけてエミシ、あるいはエゾと呼ばれた東日本の集団がアイヌであったか、アイヌ以外の和人であったかという問題は古くから議論されてきたが、未だに明確な解答がないばかりか、多くの議論は憶測の域を出ていない。しかしこの問題は北海道のアイヌを含めて、日本人集団の形成過程を知るために避けて通ることのできない関門である。なぜなら、彼らは日本人集団の小進化と無縁ではなかったはずだからである。私はこの疑問を解く糸口を発見するため、データはまだ不十分であるが日本人の頭骨計測値を統計学的に分析し、次のような結果をえた。まず現代人については、頭骨の主要な計測値が近畿から関東、東北をへて北海道(アイヌ)に至るきれいな勾配を示す。また判別関数を計算すると、東北人は他地方の和人に比してアイヌと判別される率が極めて高い。同時に、古代ではこの傾向がさらに強かったと推測される理由がある。一方他の分析によると、アイヌと和人は弥生時代から中世に至る間に徐々に分離して来たことがほぼ確実と思われるので、両者の差は、少なくとも中世以前には現代ほど大きくはなかったと見てよい。つまり古代はこの分離が進行していた時期で、この時代のエミシまたはエゾが現代的な意味でのアイヌであったか和人であったかという設問は、本来成立しないと考えられる。もちろん、近世のエゾがアイヌを指していたという点は、多くの文献や人類学的研究から明らかである。換言すれば、古代から中世にかけてのエミシ(エゾ)と近世以降のエゾとは異なるということになる。今後さらに分析を進め、この問題に取り組む必要があることはいうまでもない。

日本演劇における悲劇の観念

C. アンドリュー・ガムストル

要旨：「悲劇」というジャンルは昔から西洋文化において崇拜されてきて、アイスキュロス、ソフォクレス、シェイクスピア、ラシーヌなどは文学史上の崇高な位置をしめています。ジョージ・スタイナーの「悲劇の死」にある文章が西洋以外の悲劇の可能性を語っています。

実人生の悲劇には誰でも気づいている。しかし一つの劇形式としての悲劇は、必ずしもどこの国にもあるというものではない。暴力、悲嘆、天災、人災、の来襲といったものならば東洋芸術にも見られる。たとえば日本の演劇は、残忍な場面や儀式的な死でみちている。しかし、われわれが悲劇という名で呼ぶ、個人の苦悩とヒロイズムとのあの表現形式は、明白に西洋の伝統だけに属するものなのだ。

この論文には、悲劇を文学ではなく、芸能・舞台芸術として観た方が適当ではないかという出発点から東西の悲劇比較論をたててみます。謡曲のかずらものと浄瑠璃の三段目にしばって、日本演劇の憂い・愁嘆の観念を論じます。

日本の武士身分の崩壊

園田英弘

要旨：明治維新は武士身分に支えられた政治体制の打倒を目的とした政治的改革でもなく、武士以外の社会階級によって起こされた社会革命でもないにもかかわらず、武士階級は明治維新以降に解体されてしまった。それは何故か？ 武士階級の解体の発端は、幕末の軍事改革にあった。武士はなによりもまず「戦争人」でなければならないという思想や武芸の奨励は、もともと支配身分としての誇りと使命観にもとづくものであった。ところが、身分的な誇りや使命観を幕末という政治的・軍事的状況の中で追求した結果生じたのは、それまで密接に結び付いていた身分制の体系と武士の職分の分離であった。この分離と共に、武士の身分制の体系は破壊されていくのである。そして、武士の社会を組織する新しい原理として機能主義的平等主義が登場する。武士身分の解体は、国民国家形成によって引き起こされた意図せざる歴史的帰結なのである。

日本列島における最終氷期のモンスーン変動と旧石器文化

安田喜憲

要旨：南西モンスーンは、最終氷期以降にも、劇的に変動した。その変動は、日本列島の気候の乾湿の変動に大きな影響を及ぼした。とりわけ、夏季の降水量は、アラビア海からベンガル湾における南西モンスーンの変動と密接にかかわって変動した。アラビア海やアンダマン海の実地コアの花粉分析、酸素同位対比、炭素同位対比の分析結果は、南西モンスーンは、最終氷期や完新世には、著しく活発であり、亜間氷期にも相対的に活発であったことを、明らかにした。それらの時代の日本列島の気候は湿潤であった。一方寒冷な亜氷期には、南西モンスーンは、不活発で、日本列島の気候は乾燥化した。こうした南西モンスーンの変動と密接に連動した気候の乾湿の変動は、日本列島の自然環境と文化に大きな影響を与えた。堆積段丘の形成には、南西モンスーンと連動した梅雨期の降水量の変動が深く関わっていた。日本列島の堆積段丘は、主として、40,000年前以前に形成され、30,000年前以降は、浸食期となる。こうした、堆積から浸食への転換は、南西モンスーンと連動した豪雨の頻度が減少したためと判断される。10,000年前以降、南西モンスーンの活発化と連動して、再び豪雨が、頻発化した。日本の旧石器文化の変遷も、南西モンスーンと連動した気候変動から大きな影響を受けたことが、明らかとなった。

南西モンスーンの変動期と連動する日本列島の気候転換期には、旧石器の形態や組成にも大きな変化がみとめられた。日本列島の旧石器文化が、前期旧石器から後期旧石器へと大きく変化する33,000年前は、日本列島が著しい寒冷、乾燥気候にみまわれ始める時代に対応していた。日本の後期旧石器文化を代表するナイフ型石器の形態と組成の変化も、気候変動と深い関わりがあった。13,000年前にはじまる気候の温暖、湿潤化は日本列島の植生に大きな変化をもたらしたのみでなく、新たな、縄文時代を開幕させる上において重大な役割を果たした。

興福寺と大和山

ロイヤル・タイラー

要旨：修験道には古来、本山派（天台系）と当山派（真言系）という二つの流派があった。多くの修験道の研究、とりわけ当山修験道の伝統によれば、当山修験道の開祖は平安中期の聖宝であり、その本拠ははじめから醍醐寺の三宝院にあった。ところが、「日本大藏経」に収められている「修験道章疏」の諸文書を見ると、奈良の興福寺は少なくとも平安末期から鎌倉時代にかけて、当山修験道にとってかなり重大な位置を占めていたことが窺える。

この論文は修験道史における興福寺の役割を分析したものであるが、そのうち特に興福寺と金峯山との関係に重点をおいた。そのほかに取り上げられたのは興福寺と葛城山との関係、そして春日山の修験道というテーマである。結論として、興福寺はかなり当山修験道の「本寺」として活躍した可能性が強く、十一世紀の終わりから十四世紀まで金峯山の検校は間違いなく興福寺の僧侶が務めていたと思う。また、興福寺がその当時の山岳信仰の隆盛に大きな役割をはたしていたことも疑う余地はないのである。